

還暦おやじの
新人農業者手帳



遊佐宏文

中野市 中野区

平成27年度新規就農者



一、大地と太陽の恵みを
あなたに届けたい

四月は待ちに待った日照の月。雪解けとともに柔らかい日光が肌に心地よい季節です。

しかし、世界的にみると四月が決して心地よい季節ではないという国々も少なからずあります。日本初のPKO（国連平和維持活動）で、私自身も派遣されたカンボジアでは四月が猛暑季であり、日中の気温が五十度に達したこともありました。昼間に外を歩く人間はバカだと言われていました。そんな中、道路工事や橋の補修をしていた自衛隊員はきっとバカに見えていたのかもしれませんが。

また、家族と共に三年間勤務したミャンマーでも四月は同じ猛暑季で、あまりの暑さを避けるため、いえない、一瞬忘れるために互いに水を掛け合う「水祭り」なる伝統行事がありました。ミャンマー最北端のカチン州であってもその冬の間が日本の夏と同じくらいの気温であり、四月が待ち遠しい月ではないのです。



▶ミャンマー連邦カチン族の女性たちと



▶生き字引・下野トミヨさん（左）と妻（右）

さて、花畔のこと。私のお隣の畑では、大先輩の下野トミヨさんがお元気に数多くの野菜を栽培しておられます。いつもトマトの種を播いたかい？ キュウリも播き時だよ!! と心配してくださいませ。時々、妻が私の疑問を下野さんに聞きに行ってくれるのですが、その中であるほどと思ったことがありません。それは「農家はねえ、毎年一年生なんだよ。毎年天気も畑もタネも違ってくるからねえ…」貴重なアドバイスはもとより農家魂と元気をいただいています。さあ、いよいよ日本の食糧庫北海道の四月。待ちに待った日照の下、さまざまの農作業がはじまります。今年も北海道の大地と太陽の恵みであるミネラル豊富な野菜を皆様に届けるべく、「一年生」のつもりで頑張ります。

二、野菜ソムリエの妻から
ひと言

私が農業者となるに合わせ、妻はジュニア野菜ソムリエの資格を取りました。野菜を生産するにあたり、どのように食べるのかを承知しておくべきと思ったのです。私自身の苦手意識もあって妻にその役割を担ってもらうことにしました。妻は試験を受けることに相当抵抗があったようですが、受験勉強だけは一緒にして、なんとか合格してくれました。

そんな妻の一言は「ある時はほかむりで収穫作業、ある時はホテルでディナーを楽しむかっこいい女性農業者でありたい。」です。単に生産するだけでなく、生産した野菜がどのように流通し、料理され皆さんの口に入るのかを常々意識していきたいと思えます。

昨年末、NHKの番組で、長年素麺作りに関わるご夫婦が紹介されました。その中で、早朝に起きて素麺を作る二人が一言も発せずテキパキと数時間にわたり作業を続ける姿に、ナレーターが語った一言が「繰り返すことがやがて使命になる。」でした。

野菜作りの作業ひとつずつがやがて使命になるように、ふたりで力を合わせ生産入魂したいと思います。（了）

（平成三十年三月五日記）